

特37

989

繪

啓蒙訓話

佐澤太郎譯述

二

明治七年六月廿日官許

佐澤太郎譯述

繪啓

東京帝國博物館

類屬冊函行級

三冊一七

初乳

訓話

咀華亭藏梓



教物

育傳 館

繪啓蒙訓話卷之二

備後福山 佐澤太郎譯述

動物學

哺乳獸

胎生動物

乳をのせて子をさす。又の名  
胎生動物の内、胎内での義あり。  
胎生動物の内、胎内での義あり。

第一義あり。動物の形の夫々同じりらざる事。

汝も既に知れらる如く動物皆同一形みあらざ。

啓蒙訓話

卷二

目録

吾<sup>レ</sup>が周圍<sup>ニ</sup>居<sup>ル</sup>るのみのみ、牛馬<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>其<sup>レ</sup>犬<sup>ノ</sup>あり、  
 みのあり、蠅蟻<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>甚<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>のあり、又<sup>ニ</sup>土地<sup>ヲ</sup>を  
 歩<sup>ク</sup>くりのもあり、空<sup>ヲ</sup>を飛<sup>ト</sup>ぶりのも有り、或<sup>ハ</sup>水<sup>ヲ</sup>を  
 泳<sup>ク</sup>ぐりのも有りて、一<sup>ニ</sup>様<sup>ニ</sup>あらざ、  
 凡<sup>ソ</sup>土地<sup>ヲ</sup>を歩<sup>ク</sup>くりのみ、足<sup>ハ</sup>あり、空<sup>ヲ</sup>を飛<sup>ト</sup>ぶりのみ  
 翼<sup>ハ</sup>あり、水<sup>ヲ</sup>を泳<sup>ク</sup>ぐりのみ、鱗<sup>ハ</sup>あり、由<sup>テ</sup>人<sup>ノ</sup>其<sup>レ</sup>形<sup>ノ</sup>  
 の、<sup>レ</sup>相<sup>似</sup>するもの、又<sup>ニ</sup>食物<sup>ノ</sup>の、<sup>レ</sup>同<sup>ト</sup>じさ  
 の、<sup>レ</sup>相<sup>違</sup>うて、種<sup>類</sup>を分<sup>チ</sup>ち、夫<sup>々</sup>總<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>を與<sup>フ</sup>、尚<sup>レ</sup>  
 一<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>ハ、去<sup>リ</sup>の後<sup>ニ</sup>追<sup>テ</sup>々<sup>々</sup>説<sup>キ</sup>き聞<sup>ク</sup>くとべし。

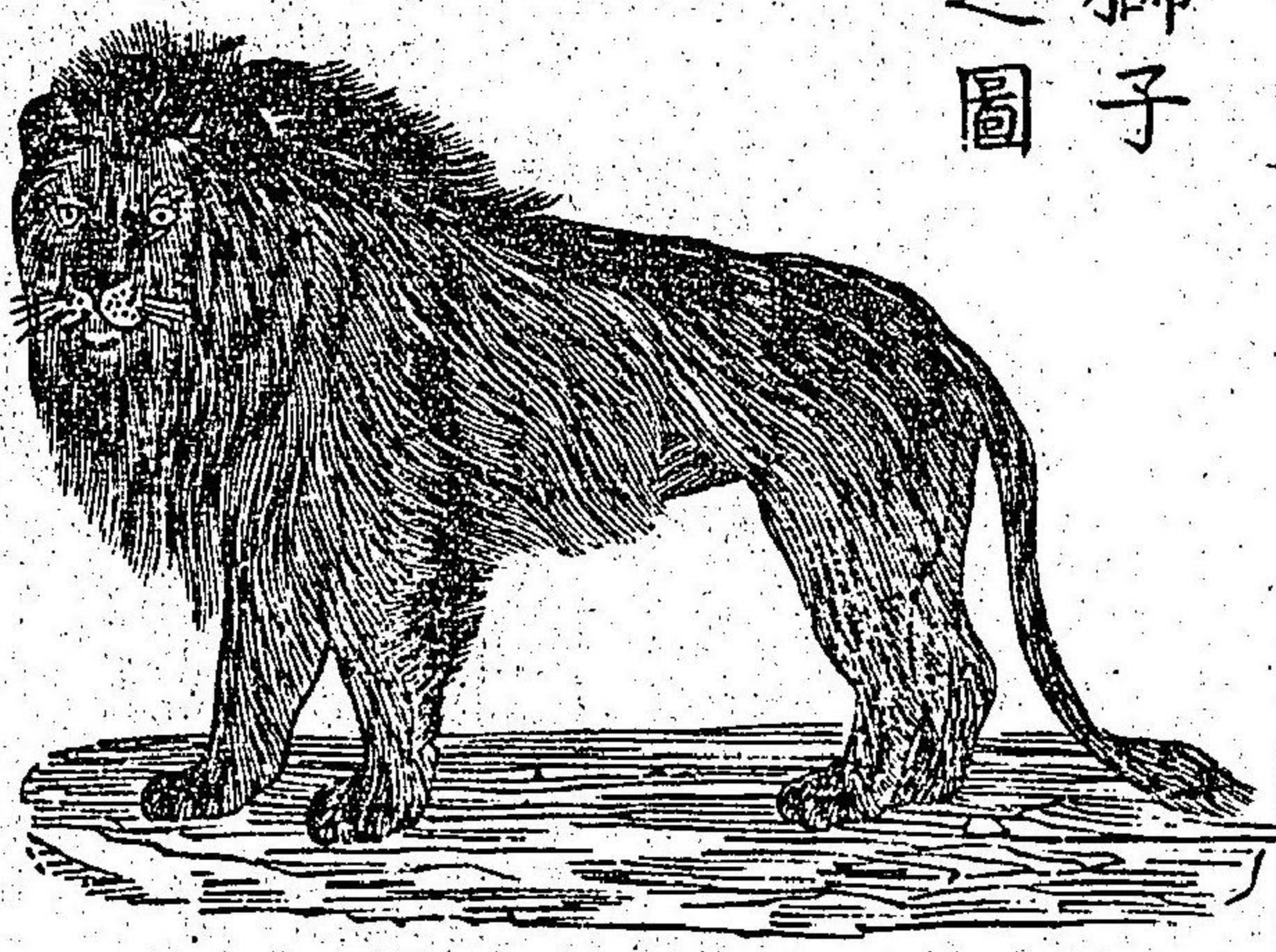
第二 咬肉動物の事

彼<sup>ノ</sup>の猫<sup>ヲ</sup>を見<sup>ル</sup>、猫<sup>ハ</sup>日向<sup>ニ</sup>往<sup>キ</sup>、又<sup>ニ</sup>火<sup>ノ</sup>の側<sup>ニ</sup>寄<sup>リ</sup>  
 りて、其<sup>レ</sup>體<sup>ヲ</sup>を温<sup>ム</sup>むる事<sup>ヲ</sup>を好<sup>ム</sup>くりのあり、猫<sup>ハ</sup>四<sup>足</sup>  
 有<sup>リ</sup>て、毛<sup>ハ</sup>あり、事<sup>ハ</sup>汝<sup>ハ</sup>よく知<sup>レ</sup>る、其<sup>レ</sup>外<sup>ニ</sup>  
 長<sup>爪</sup>と、齒<sup>ト</sup>とある事<sup>ハ</sup>、亦<sup>チ</sup>知<sup>レ</sup>る、其<sup>レ</sup>長<sup>爪</sup>  
 と、齒<sup>ト</sup>と、何<sup>ノ</sup>益<sup>ヲ</sup>立<sup>ツ</sup>つりのぞと、汝<sup>ハ</sup>い  
 つり、猫<sup>ハ</sup>鼠<sup>ヲ</sup>を捕<sup>ム</sup>る事<sup>ヲ</sup>を見<sup>ル</sup>る事<sup>ハ</sup>あつし、鼠<sup>ヲ</sup>を  
 抓<sup>ル</sup>む、其<sup>レ</sup>長<sup>爪</sup>を用<sup>カ</sup>、之<sup>ヲ</sup>を嚙<sup>ク</sup>碎<sup>ク</sup>する、平<sup>生</sup>怒<sup>リ</sup>  
 る時<sup>ハ</sup>、顯<sup>ニ</sup>其<sup>レ</sup>所<sup>ヲ</sup>の大<sup>ナ</sup>ある、四<sup>本</sup>の牙<sup>ヲ</sup>を用<sup>カ</sup>るあり、

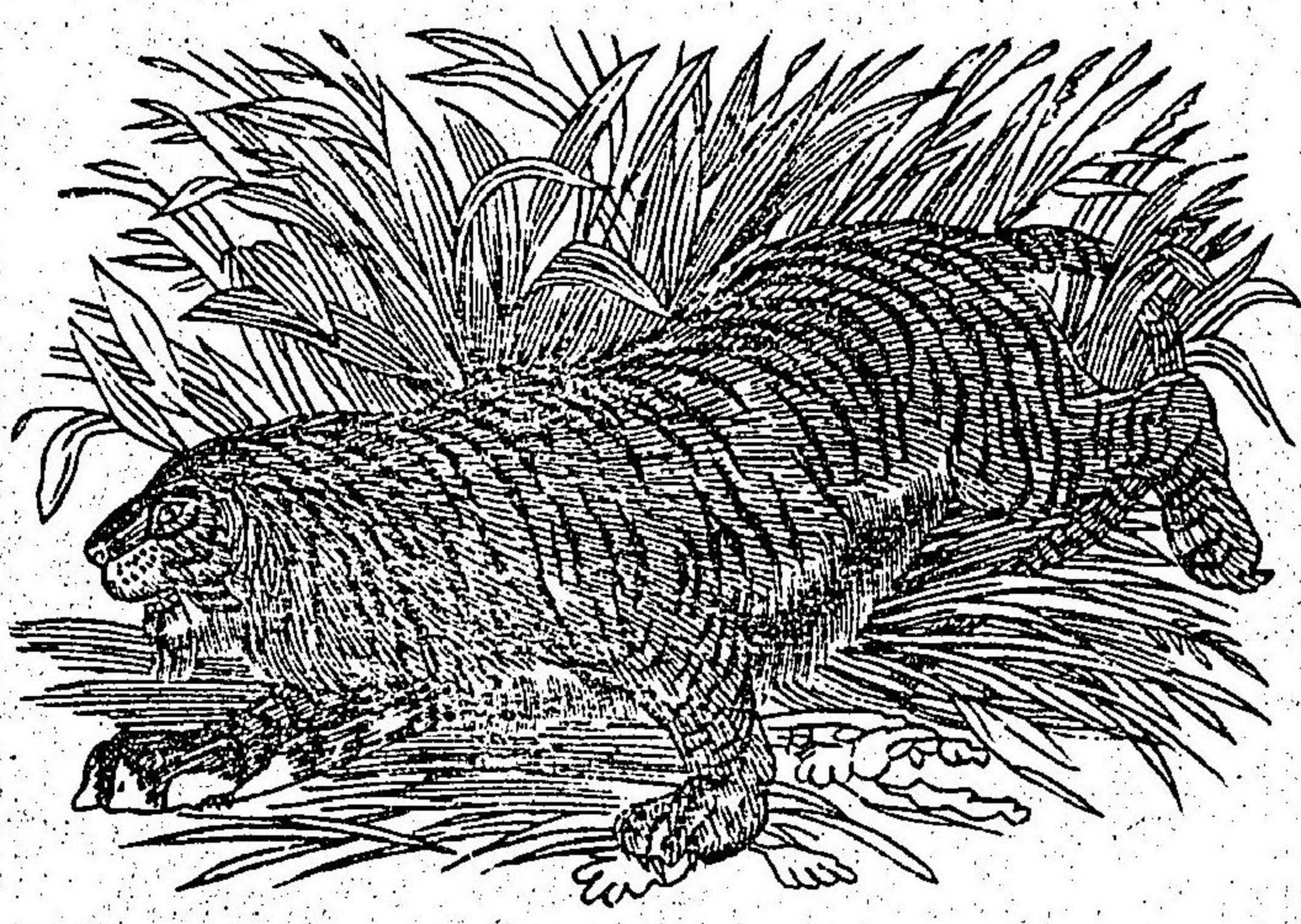
其外も、猫の如く他の動物の肉を食とするものあり。總て之を啖肉動物と云ふ。肉を喰ふ動物と云ふ事あり。

熱國も別して大なる啖肉動物多し。其形甚猫み類し。暗黒の所に入ても其目よく輝き夜も物を見其上大なる長爪あり。其爪の自在に伸すべ

獅子之圖



虎之圖

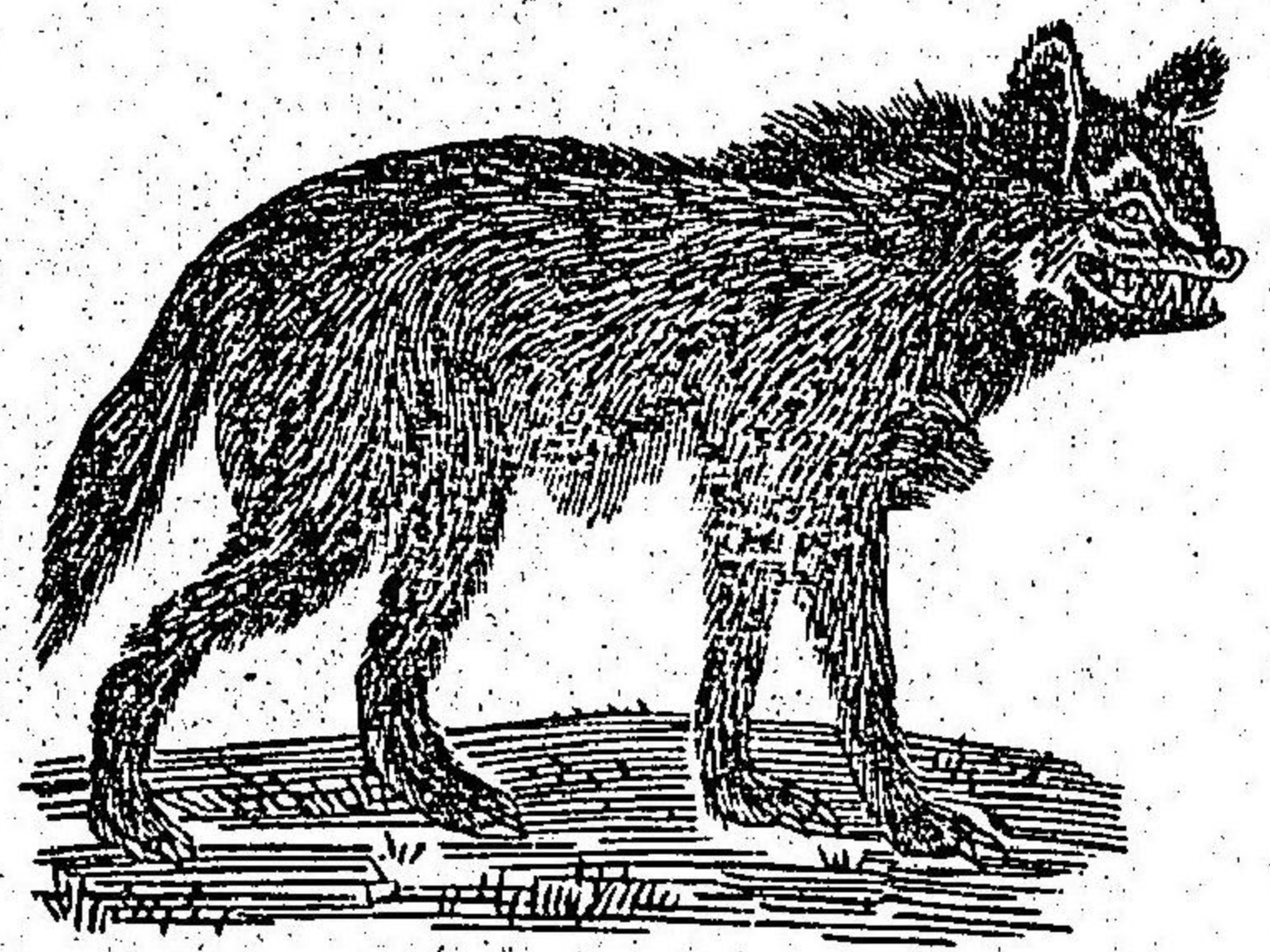


く又縮むべし。其性も猛くし。惡し。獅子虎のどがひ。是皆大なる啖肉動物あり。汝中へ犬を見よ。犬も足も長爪あり。されども其爪は猫の如く鋭くらず。小き齒の外も大なる齒四本あり。之を牙とい

人。牙。肉。を。噛。碎。く。為。の。齒。あり。故。犬。も。亦。啖。肉。動物。あり。羊。を。食。人。狼。并。不。雞。を。食。人。狐。へ。犬。に。似。る。獸。あり。是。も。亦。啖。肉。動物。あり。

犬。猫。同。啖。肉。動物。あれ。ど。も。狼。獅子。の。如。く。猛。惡。ある。獸。あ。ら。ず。犬。猫。も。元。野。に。住。む。時。の。猛。惡。あり。し。が。追。々。人。に。馴。れ。人。も。亦。之。を。愛。し。其。性。次第。温。順。と。為。す。

狼之圖



昔。人。の。敵。あり。し。も。今。遂。人。の。友。達。人。の。召。使。と。も。あ。れ。る。あり。

第三 食草動物の事

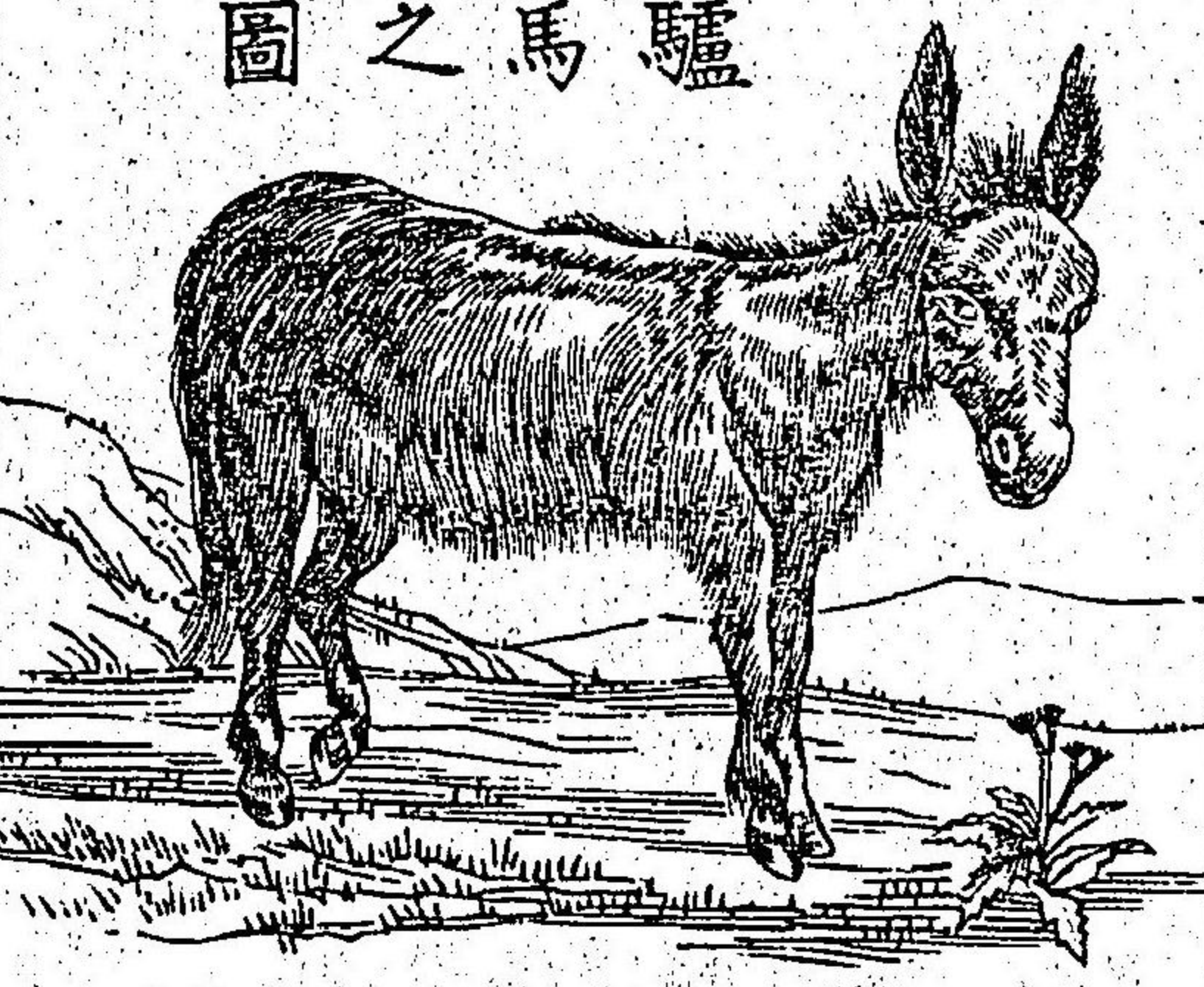
汝。いつ。り。牛。羊。山。羊。あ。ど。も。見。る。事。あ。る。べ。し。是。等。の。常。に。小。屋。の中。に。居。り。人。之。を。つ。れ。て。野。に。ゆ。く。事。も。あり。之。を。野。に。は。れ。ゆ。く。何。の。為。と。し。よ。小。草。と。木。の。葉。と。を。食。り。し。む。る。が。為。あり。此。動物。の。長。爪。も。あ。く。牙。と。ら。し。尖。り。し。る。齒。も。あ。り。是。肉。を。食。た。ざ。ら。ず。故。不。用。あ。れ。ば。あ。り。草。を。

食ふが故に。此類の獸を食草動物としふ。  
 食草動物ふ。大抵角あり。角は他の物来りて害  
 せんとす。時ふ其身を護る為の器械あり。彼の  
 鋤を繋ぎて、田地を耕へ。牛并ふ牛乳を絞る。此  
 牛の類。其毛短し。しつども。山羊の毛はひり  
 毛長し。荒し。羊綿羊の毛長し。細あり。其  
 長し。細あり。毛を織物毛と名付け。織物に  
 用かるあり。  
 右ふ。しつ動物。皆啖肉動物の如き。長爪あり

し。大あり。硬し。爪あり。之を蹄としふ。蹄は其真  
 中。縦に割目あり。故に此の如き食草動物は亦  
 足に割目あり。動物としふ可あり。

食草動物の中。一種の者  
 あり。馬。驢。馬。是あり。葉と枯  
 草とを食ふ。りのみ。角あり  
 毛は皆短し。その頸の上  
 みのみ。長し。毛あり。之を鬃  
 としふ。足は蹄あり。之

圖之馬驢



小割目あり。

食草動物ハ大抵柔和ありて人ハ馴れ其中  
 久の召使と為りて人の働を手傳ふりのあり乳  
 を絞りて人の養と為さるゝものあり又毛を取  
 りて織物を作らるゝものあり又毛を取  
 其さぐひ甚多し日本の森林ニ住むものあり  
 遠國ニ居るものあり今茲ハ一々之をい  
 たる汝等漸々成長するに從ひ尚ら一々之を  
 讀みて其詳あるを識り明らむべし。

家兔之圖



第四 錯齒動物此事

汝ハ、ら、ら、ら、家兔を見らる事、つゝ、家兔ハ其  
 性柔和ありて、物怖じたる獸  
 耳ハ長く、常ニ動  
 若し、物音を聞けば、驚く事  
 甚し、人之を捕へんとすれば、  
 飛び去るあり、是前足短くし  
 て、後足長き、故に、歩らば、

て、飛ぶあり。

家兔の草木の葉を食ふを見ざる事有り。前  
 齒を以て前後に磨錯して之を食ふ亦よく胡蘿  
 藷芋あどもを嚙るりのあり。總て家兔の如く前齒  
 の尖りてよく物を嚙る獸を錯齒動物と謂ふ。  
 野兎も亦錯齒動物なり。物怖する事ハ家兎より  
 も甚し。鼠と鼯鼠とい。何れも小に錯齒動物なり。  
 甚害を為さるりのあり。

第五 哺乳獸の總論

右小りく動物の體は大有るりのも小なるりの

も。野に住むものも家飼ふものも皆四足と毛  
 と有りて地上を歩くが故も亦歩行獸と云ふ。何  
 ら。犬猫の如く乳汁を以て其子を育つる故も哺  
 乳獸とい謂ふあり。

哺乳獸ハ其其子の為に心を動かすものあり。汝  
 も。りりり猫の子のその母の側へ居るを見らる  
 ちとつるべし。母ハ大に之を愛し子ハ母の背へ  
 登り又ハ母の尾を持ちて戯れ遊ぶ。追々成長を  
 れハ母之ハ獨食する事を教つ。子ハ鼠を捕ふる



ちとを教ふ。

獅子も其子に戯れよく心を用ひて之を育つる

ちと猫と異あるちとあし。總て動物の母に皆

其子を愛する。天性あるちと此の如し。若母に此

天性あくして其子を愛せし心を用ひて之を育

てざれば子の生れの中へあてよく自分の用を

弁むるものみあらざるが故に大抵皆飢凍え

死むるあらん。

○鳥

第一 小鳥の事

彼の小鳥を見よ。小鳥の大小人の心を慰むるも

のみあらばや。よき聲を出し。轉つるものもあり。又

身輕み。樂そ遊ぶりのもあり。何れも細き足

み。彼方此方と飛び廻り草木の實あどを啄

又。無血蟲を食とあり。春に至りて。苔織物毛羽

あどを見れば。之を啄て。速く去るあり。是何處

み去るるを汝に知さるや。

苔織物毛羽あどを啄て。木の枝又。壁の窪處

往きく。巢を作るあり。先苔を以て。巢の外圍と為し。織物毛と羽と。軟あるり。故之を其内部に布き。足と嘴とを以て。よく之を圓くを。汝ら。小鳥の巢を作るを見ら。あともありや。其之を作ら。甚容易あらす。巢の内部を軟みする。素より。肝要あれども。餘り多く。物を集むれば。却て。より。一りら。ざるものあり。總て鳥の皆。鶏の如く。卵を産むものあり。汝もよく。知れるあらん。皆其卵は。是非一定の日數の間。

母鳥之を温め。されば。孵ら。あともあり。既ふ卵より。出て。鳥とあり。とも。其初。羽あ。く。飛ぶ。あとも。あり。又。鶏の雛の如く。自ら食む。あともあり。又。故。親鳥。他所より。食物を啄。来り。必先。自分の嘴を以て。よく之を碎。き。その子。亦。與。あり。其。後。漸々。成長。し。羽。も。生。む。れ。親鳥。之。空。を。飛。ぶ。あ。とも。教。ふ。恰。も。汝。の。母。汝。も。歩。行。を。教。へ。き。り。し。と。異。る。あ。とも。あり。是。亦。鳥。の。天。性。あり。實。に。感。心。を。さ。ふ。ら。く。ば。や。あ。れ。を。見。て。其。辛。苦。を。想。

汝等決して鳥の巢を毀つことありと又之  
を取らばつらむ。

小鳥のよく轉り野又の園に於て所々を飛び  
くそのありその數も多し種類も亦多し鶯雀燕  
あど皆小鳥あり。

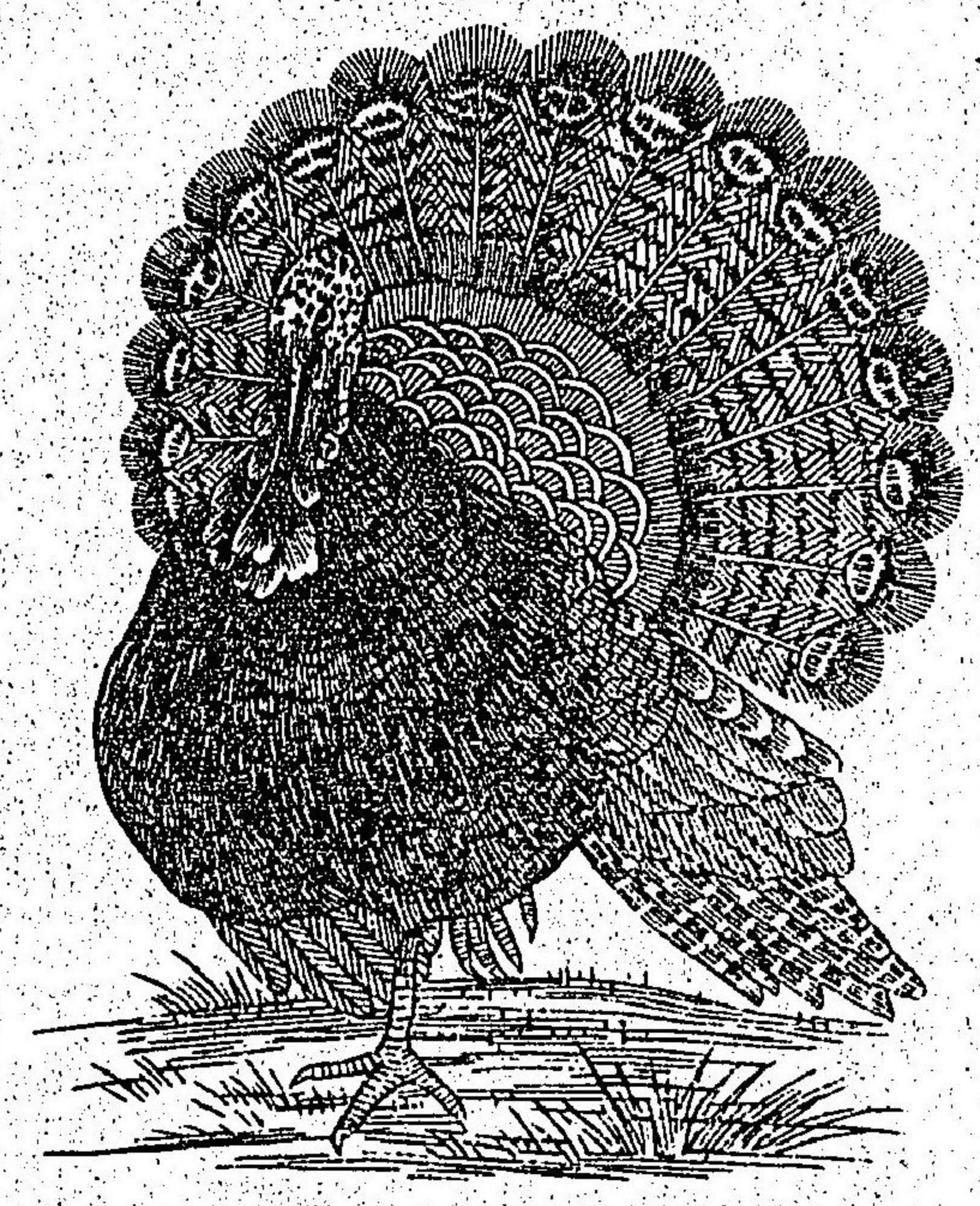
### 第二 鷄類の事

小鳥に較ぶれば甚大なる鳥あり鷄類と總名を  
汝鷄并ふ七面鳥の色の種々變つて見ゆる  
やあるべし此鳥の巢を木の枝に作り居重く

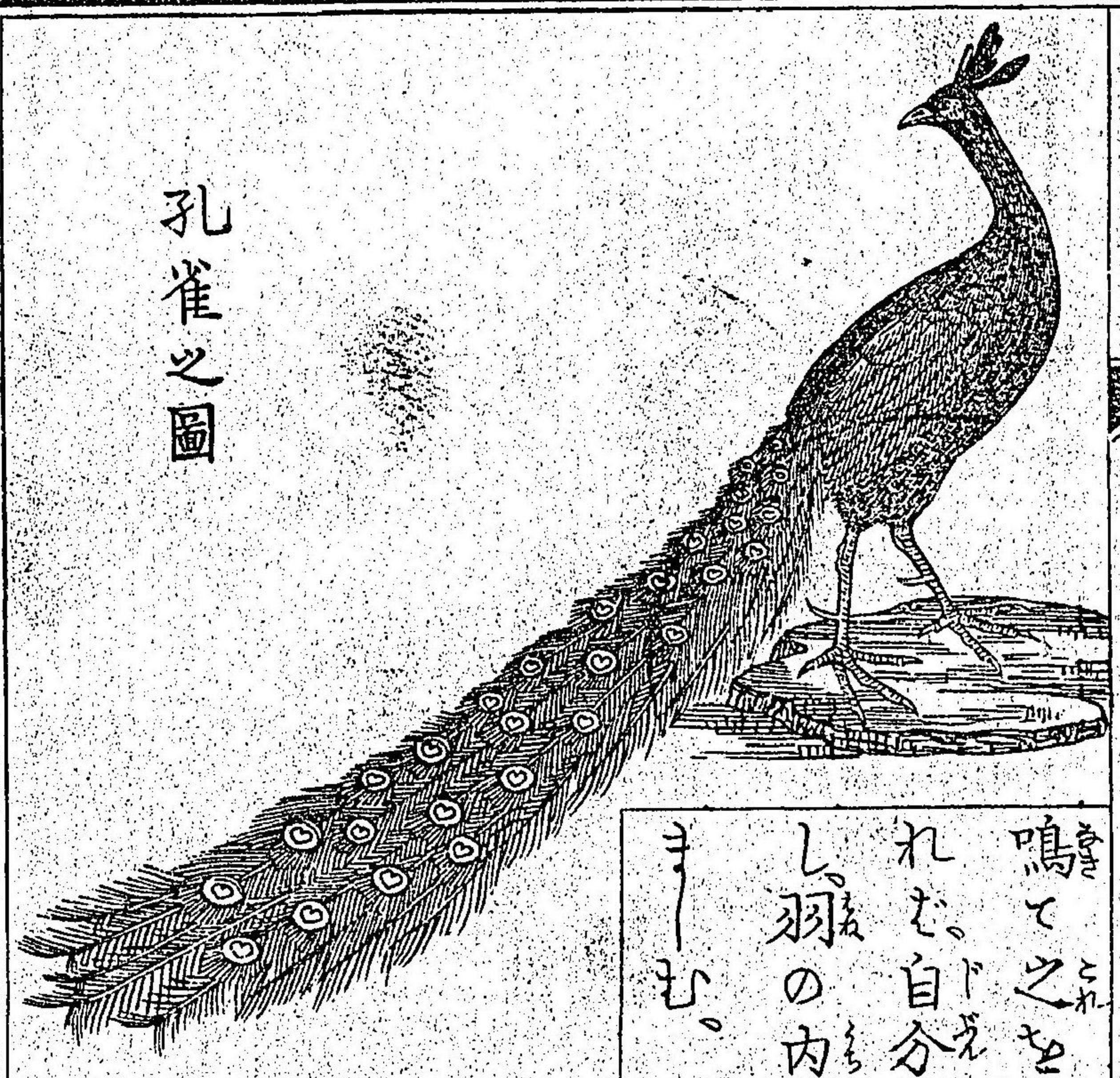
しつて空を飛ぶこ

七面鳥之圖

と稀あり静み歩  
ま土地を掘り穀  
類又土中の小  
虫を搜りて之を  
食ふ其雄鷄の羽  
を綺麗あり輝



る。頭赤色の冠あり曉方より高く首を擧て  
時を作る雌鷄も時を作るものとあく離る時



孔雀之圖

鳴て之を呼び雛勞る  
れむ自分の體を低く  
し羽の内ふ納れて休  
まむ。

孔雀錦鶏雉  
あどの皆其  
形鶏に似こ  
るが故に總  
て之を鶏類

と謂ふあり。

第三

掌形足鳥即水鳥の事

鳴也亦大なる鳥あり然れども鶏類にあらざる其  
貌大なる之と異なり大抵りつむ水に住み嘴は  
平なり幅廣く池の底の泥を捜るふ便利あり  
草と土中の小虫と肉食とを圍の中へ納れて穀  
類を以て之を飼ふ妨あらず足の構造水を泳ぐ  
ふよりしさいのあり汝ららる鴨の足を見と  
つとあらざる鴨の足の平なり幅廣く其丈

夫も指と指との間、膜ありて、指皆一續とす。之を以て、水を掻く。前も進むと、猶舟に於て、楫を用かざるが如し。其足を名付る、掌形足と云ひ、其膜を蹠膜と謂ふ。夫故に、鴨鵝并に、其外の水鳥を名付て、亦掌形足鳥とも謂ふあり。

第四 鳥の總論

汝も知るが如く、鳥の種類多くし。夫々其形を異し、れども、亦大に相似し。所あり、即鳥の、皆足二本あり。足あり、大なる指あり。爪あり。

あり、皆毛あり。代も羽あり。獸の如く、口ありし。嘴あり。嘴、硬くして、齒に代と為り。其上鳥の、皆翼あり。翼、人の手、獸の前足より、即大あり。羽あり。楫あり。鳥之を用か、空を飛ぶ。と、恰魚の鱗を用か、水を泳ぐが如し。

○爬行動物此事

人若し、時候煖ありて、日の輝く時、古壁の側を通行とれば、石間の孔より出で、壁を歩きて遊び、物音を聞て、忽ち逃て復孔に匿る。小動物ありて、見

是即蜥蜴類あり。蜥蜴類ハ荒色のりの  
 あり又綠色のりのあり其体平あつて毛あつて鱗  
 あり。吻尖り舌細長く針の如く。忽ち口より  
 出で又忽ち口より入り。眼輝き尾長し。蠅并み土中の  
 小虫を食と足短く細く歩く時ハ殆腹  
 を地と曳くものあり。斯腹を地と曳きて歩くを  
 爬行と云ふ。故に爬ふ動物を名付て。爬行動物と  
 云ふあり。  
 汝をらつり。蛇は見ざる。ちとありや。蛇ハ牧場又

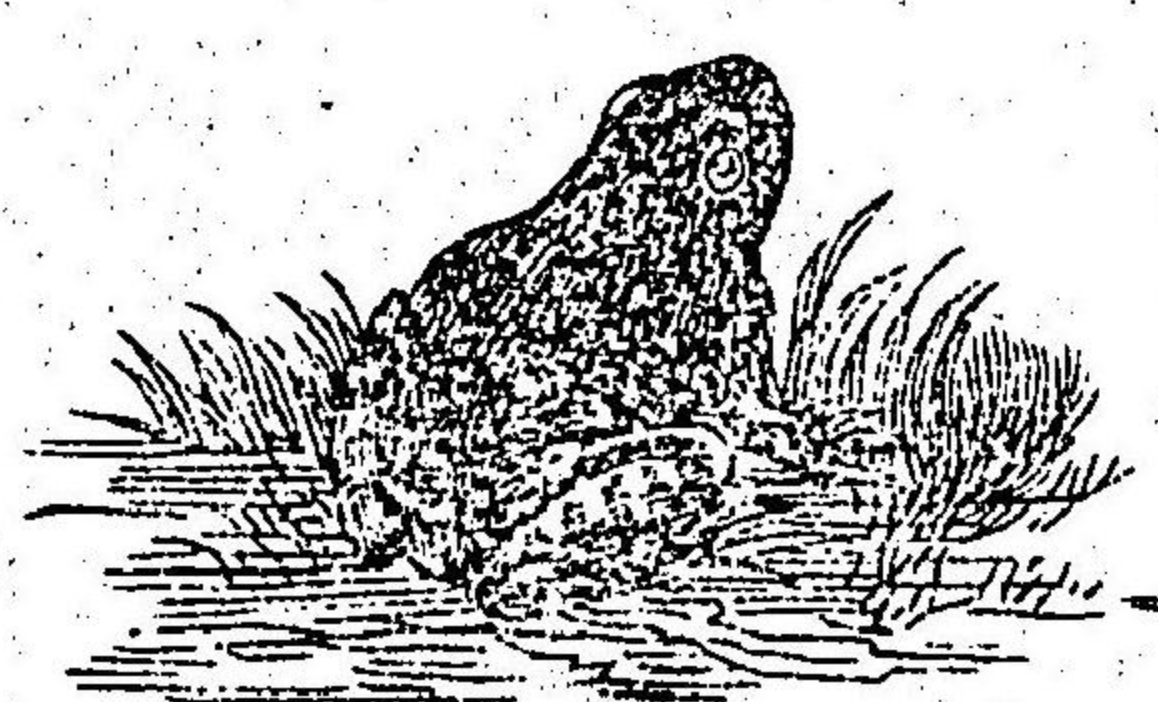
濕地又多し。全く足あつて爬ひて進むもの故に。  
 足のあつて爬行動物あり。此をびと。蛇類と謂ふ。  
 蝮ハ蛇類あり。但蝮ハ土中の小虫あれども。蛇類  
 ハ土中の小虫あつて。  
 龜ハ其硬き鱗甲あり。其鱗を覆ふ鱗甲ハ即  
 龜の家あり。頭と尾と四の小足とハ家の外へ  
 出るちとわれども。其他ハ決して家より外へ出  
 りあつてあし。龜も爬ふが故に。亦爬行動物あり。

○蛙類の事

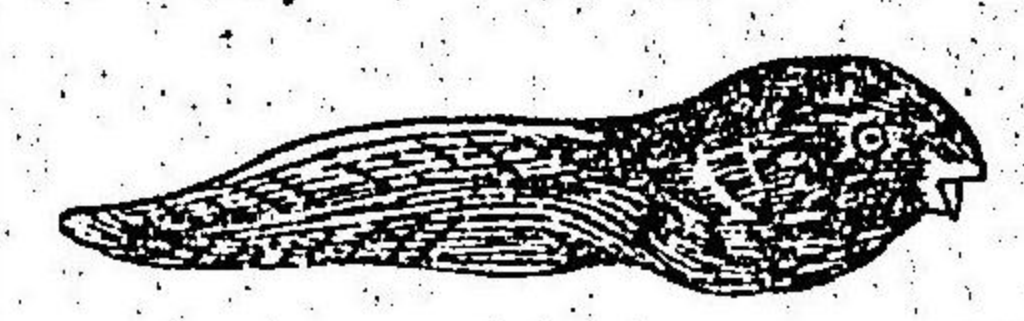
沼井池の邊の草の中ハ蛙の居るあり。蛙ハ汝ハよく知れる。故に今委しく話をハ。及たぎらづ。蛙の後足ハ前足より長き故に。よく飛び又足ハ。蹶りて。よく水を泳ぐハ。汝も知れる所あり。

諸汝の知らざる事とあらん。蛙ハ生れの儘蛙とあり。其初生る時ハ足のあき小き動物あり。平之。身より二倍長き尾あり。身ハ

蛙之圖



蝌蚪之圖



割合あり。頭甚大あり。故之を蝌蚪と稱ふ。蝌蚪漸々成長され。其尾ハ次第に消え失せて。足を生じ。遂に蛙とふるあり。尚外ハ初生る時ハ蝌蚪あり。其後形の變るものあり。蟾蜍蝦蟆など。皆是あり。此ハハの動物ハ其形のよく蛙と似るを以て。總て皆蛙類と謂ふ。

○魚の事

是迄話せし動物ハ皆陸に住むものあり。其内ハ

時々水に入るとそのもあはれども水中に居る呼  
 吸もあつとあつとをさうさう故も久しく水中に居  
 れば必死を又とて水面に住むるものもありされ  
 ども何れも水の中に住むるのみあつた然るも  
 魚の之も又とて常も水の中に住むるを水とり  
 引攀れば死むるものあり其常も水の中に住む  
 て歩くとあつとが故も足を用の所なく泳ぐ  
 為の楫を必要とん故も魚の鱗は即泳ぐ為  
 の楫あり。

魚の哺乳獣の如き毛もあつ鳥の如き羽もあ  
 くと皮も鱗なり。  
 魚の形も大小も種々あつ大あるものあり小こ  
 そものあり長きものも有り平ありものも有り或  
 り圓さのものも有り其色も亦異あつて鼠色なり  
 青色なり赤色あり金色なり但此の如く形も大  
 さも色も夫々異あれども亦大に相似する所な  
 りと他の動物と見分らるあつと甚容易あり  
 魚の骨は薄くして撓ふ其性の甚食を貪り同類



也。相食あひくらふ。至いたる。子こふ心こころを用もちかゝるの天性てんせい必かならずしも。  
あつあつあし。

海湖うみうみ又またも大おおあつ川がはの邊へみ魚うしを捕とらふを以もつて。  
業わざとまゐるものあり。魚うしを捕とらふ。あつあつ魚うしと謂いふ。  
漁人りしやうじん其得そのとくる所ところの魚うしを市いちに賣うり亦また自みづから之それを食くらふあり。

○無血虫むけちゆう此事このこと

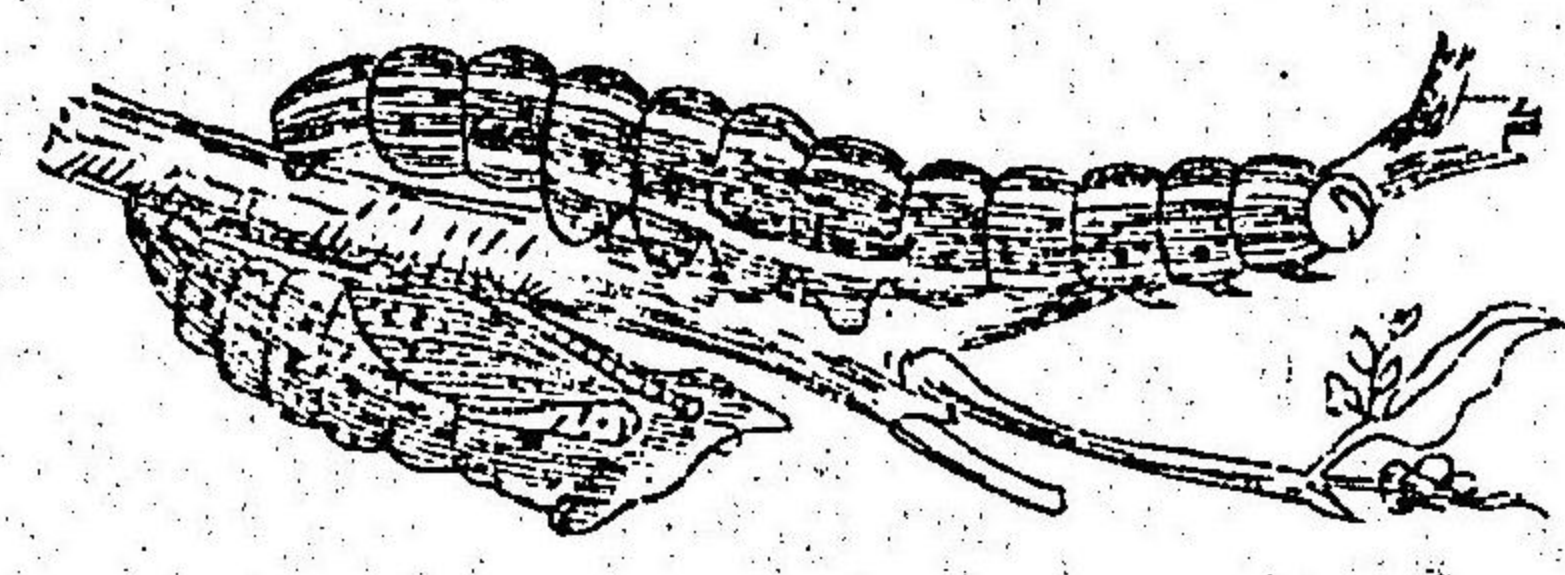
茲こゝ青虫あおむしと蝶ちょうとを并ならべて汝みづかに見みて相あひ似にたりも  
のうと問とはる。汝みづか必かならず答こたへて然しから乎や。蝶ちょうも翼つばさあり。

よ〜空そらを飛とび見みて樂あそむ。むづさ。そのあれども青あお  
虫むしも之これと異ちがふ。と。這はひ。進すすみ。其見そのみ苦くし。さ。その  
ありと。言いはん。然しかれども。青虫あおむしも。見み苦くし。から。げ。志こころ  
の。も。あ。ら。げ。吾われの。青虫あおむしの。綺麗まじかある。その。を。見みと  
る。あ。と。り。今いま青虫あおむしと。蝶ちょうとの。事ことを。左ひだりに。話はなさん。汝みづか  
よ〜聞きく。べし。

青虫あおむしの。木きの。葉はを。食物しょくぶつと。す。う。が。故ゆゑに。初はつめの。母心ははこころ  
を。用もちかゝる。卵たまごを。木きの。枝えだに。産うめ。つけ。子この。生うま。へ。み  
及および。か。の。づ。ら。食くらひ。得える。む。儲たくわへ。生うま。へ。木きの。葉はを

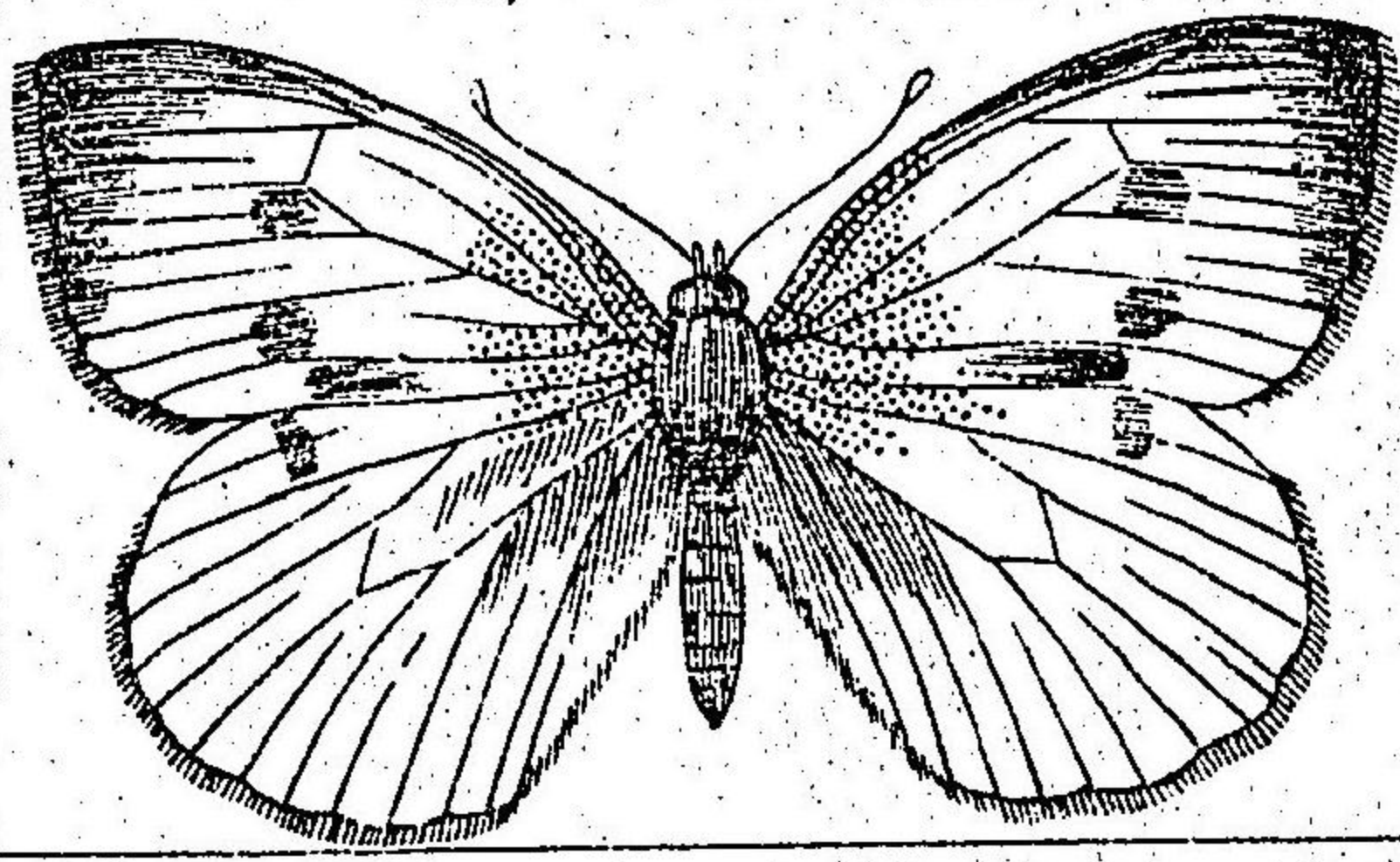
食ひ漸々成長されば、食ふあとを止め、其皮を硬くあり、毛も足の縮まりて、殆ど動くことなし。世の之を見、青虫死せりと見ゆ。然れども、死したるふあり。自分殻を作して、其中に入りきるあり。其殻の中に入りたるを繭と見ゆ。其後此殻を破りて中より出るとあり。即蝶あり。既蝶とあれば、一生涯翼を開きて飛び、花より花

青虫と繭の圖



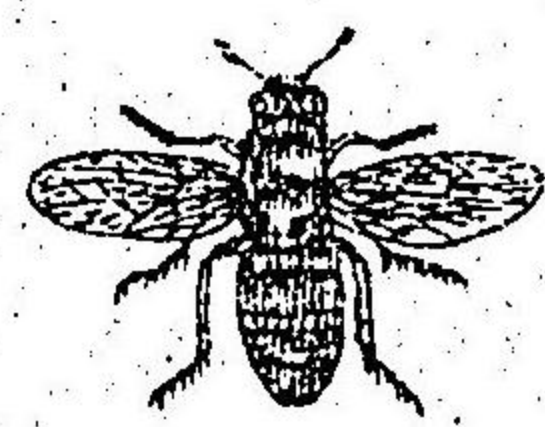
ふ戯れて遊ぶものあり。

蝶之圖



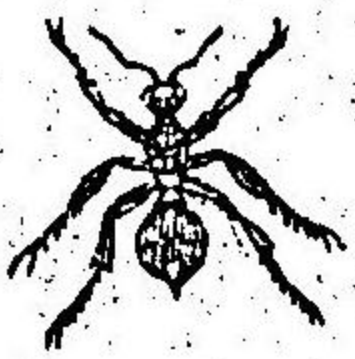
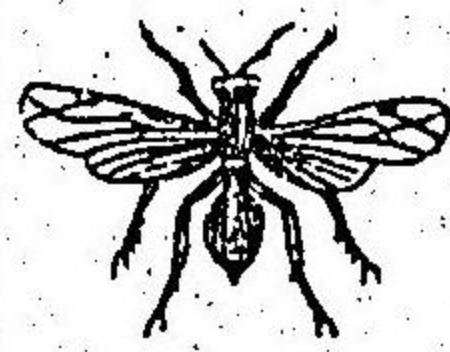
れ六本の足を生むるあり。無血虫も種類甚多し。其内汝のよき。知れりものを話さん。

蜜蜂ハ花の中へ入る。其汁を吸ふ者あり。花の汁ハ蜜を作ると必要あり。そのみし。既ニ蜜を作せば。木の幹の窪み之を集め。又ハ人の之を取らんが為。設け置く器の中へ巣を作ると。之を納む蜜蜂も。人之を怒らすと。針を以て刺し。刺を諸の蜂も。蜜蜂ハ似し。無血虫あれども。蜜を作事あり。蜂ハ多く群を為し。土地ニ穴を掘りて住とあり。其穴を蟻の巢と謂ふ。冬の間ハ寒の為ニ。體凍え



蜜蜂之圖

翼ある蟻之圖



て。全く食むる。あともあり。蟻ハ翼のつる。そのと。あさりののと。二様あり。

其外。蠅并ハ刺く人を刺し。血を吸ふ所ハ蚤咬も。亦皆無血虫。初ハ其形軟虫の如き。そのあり。

○動物有の總論

動物の大畧。右の如し。是誠ニ動物學の入口にて。此外も。知らず。あつぎ。あつぎ。あつぎ。ありと知るべし。

是迄の說話みて大あることのい言ふ及り小  
 き無血虫に至るまで動物の皆生命ありんごとく  
 自在に動さ。天性も有り又よく物事を感じ之を  
 打てが痛を覺ゆらあとの汝もよく曉りごとく  
 一。さすれば動物の苦しみもむづかさそのより  
 ぞ小鳥の巢も取らざらば蠅や蝶あとの足や  
 翼をも引裂くづりぐらあとも亦よく解りこ  
 るあらん多くの子供の中ふの間動物を苦しめ  
 て樂しむものあり是等の必竟動物も痛を覺ゆ

るといふことを知らざらばそのみへ深く咎むく  
 さあもあざされども汝の既に動物を苦しめし  
 むらふ惡しき事らを知れら故に以後に決  
 して不人情の事を為さずと勿れ若又無學の子  
 供不人情の事をむらふものあらば汝之に何物も  
 限らば總て生命の天より授けらるそのあて人  
 間するもの生命を助らるあて本意よく決し  
 て生命の邪魔を為さざらざる昔をよく説聞  
 せよ。

繪入啓蒙訓話卷の二終

卷の二の問

○哺乳獸

第一 動物の形夫々同ドクラギる事の間

動物の形も皆夫々同ドクラギる。同ドクラギる。又

如何様も異あるや。○土地を歩くものあり。何あ

りや。○空を飛ぶものあり。何ありや。○水を泳ぐ

ものあり。何ありや。

第二 啖肉動物此問

猫の如何の動物あり。其長爪と齒との何の爲る。

用ゐる物ぞや。○如何の物を啖肉動物と謂ふや。  
 ○啖肉動物といふ。何と謂ふ事ぞや。○熱國の大あ  
 り。啖肉動物の其有様如何し。如何様のそぐ  
 ひありや。○犬の如何。○犬の大あり。齒を何と謂  
 ふや。牙の何の為。用ゐる物ぞや。○犬の啖肉動  
 物ありや。否や。○狼并。狐の如何。○犬猫も。狼獅  
 子の如く。猛惡の獸ありや。○犬猫の元如何様の  
 獸あり。如何して。人の友達人の召使と為れりや。

第三 食艸動物の問

人の牛羊山羊あどと。野につれゆく。何の為ぞ  
 や。○牛羊山羊を。其形如何。何故。之を食草動物  
 と謂ふや。○角の何の為の器械ありや。○牛の毛  
 の如何。○山羊の毛の如何。○羊の毛の如何。○織  
 物毛の如何。如何の毛を謂ふや。○牛羊山羊あど  
 の爪の如何。○牛羊山羊あど。何を食ふや。角あり  
 蹄の其形如何。○馬及驢馬の何を食ふや。角あり  
 や。否や。○馬及驢馬の毛の如何。頸の上の毛を何  
 と謂ふや。蹄の如何。○食草動物の大抵其性如何

あや、如何様の事を為さや。

第四 錯齒動物此問

家兎の性と形と如何。○家兎ハ何故ニ歩クハ  
しと飛ぶや。○家兎ハ如何して草木の葉を食ふ  
や。其外何を嚙るや。○何を錯齒動物と謂ふや。○  
野兎ハ其状如何。○鼠と麩鼠と如何。

第五 哺乳獸の總論の問

是追話ヤ動物ハ如何アヤ。其一名を何と  
りや。○何を哺乳獸とらや。○哺乳獸ハ如何。○猫

の子ハ如何其母如何して之を育つるや。○總て  
動物の母アハ如何の天性アリヤ。○若母ハ此天  
性アハ如何。

第一 小鳥の問

小鳥ハ如何のやアヤ。何を食ふや。○小鳥ハ春  
ふ至レバ何を為さや。○苔織物毛羽アハ何を啄み  
何處ニ往まん。何を為さや。○巢の作方ハ如何。○  
何故ニ織物毛と羽とを巢の内部ニ布くや。○何

故ふ巢の作方なり。ちりり〜こや。○鳥は皆卵を産  
むや。否や。○如何とれば。卵化て。鳥とあらや。○鳥  
の初て生れし時。如何。○親鳥子に食物を與  
ふ様子。如何。○子鳥漸々成長されば。親鳥之  
を何と教ふるや。○何を。小鳥とりよや。

第二 鶏類の問

鶏并ふ七面鳥と木の枝に巢を作ら。又く空  
を飛ぶ。何を食ふ。○雄鶏と雌鶏との違ひ。如  
何。○何故に孔雀錦鶏雉などを鶏類とりよや。

第三

掌形足鳥即水鳥の問

鴨も亦鶏類。其貌鶏に似たり。大抵りり。何  
處に住むや。○鴨の嘴。如何。何を食ふ。便  
利あるや。○鴨は何を食むや。○鴨を圍の中  
飼ふ時。何を食む。ちりや。○鴨の足。其形  
如何。何を。何を。為ど。○鴨の足を。何と名付  
る。○何を。掌形足鳥と名付るや。

第四 鳥の總論の問

鳥は皆其形同じや。否や。○鳥の相似しる所。



如何○翼の如何のそのみえ何の用をまひや

爬行動物の問

蜥蜴類の其色如何其形如何○蜥蜴類の歩行を

如何○何を爬行動物とりや○蛇の何處多

きや○何を蛇類とりや○蝮と蛇類との違ひ

如何○龜の體を覆ふそのり何ぞや○龜の家上

り外に出る所何ぞや○龜も亦爬行動物り將

然らざらん

蛙類乃問

蛙の何故よく飛び何故よく水を泳ぐ○蛙

の初て生る時其形如何之を何とりや○

蝌蚪如何と蛙とあるや○蛙の外も亦初

蝌蚪あり其後形の變るものありや○蟾蜍の如

何○何故も蟾蜍のよくひひ皆蛙類とりや

魚の問

魚と外の動物との連り如何○何故も魚より足

なくしと鱗のや○魚の毛あり羽あり

其皮の何りや○魚の皆大さる色も形も一

様ありや否や。○魚の骨の如何。○魚の性の如何。  
 ○魚の子の心を用ゆる。天性ありや否や。魚を捕  
 ろうとを何とらふや。○漁人の其得る所の魚  
 を如何とらふや。

無血虫の問

青虫と蝶とを并て見せあぐ。相似たるものとき  
 うら。○青虫の真を見苦しき。○青虫の何故ふ  
 卵を木の枝に産み着るや。○青虫の成長をれば  
 如何あるや。○世の人青虫死せりとらふる死

まらふあぐ。如何とらふや。○青虫の殻ふ  
 入りするを何とらふや。○青虫の殻より出ても  
 のり。何ぞや。○蝶の一生涯何をすや。○蝶の外  
 みも亦形の度々變る動物ありや。○形の度々變  
 る動物を何とらふや。○無血虫の形全く整へば  
 如何とらふや。○蜜蜂の花の汁を吸ふ。何の為  
 ぞや。○蜜蜂の蜜を作れば之を何處に置くや。○蜜  
 蜂を怒らせあぐ。如何とらふや。○蟻の群を為し  
 何をまらふや。○蟻の冬の間如何。○蠅并る蚤蚊を

如何の動物ありや

動物有の總論の問

動物の右の外ありや。何れありや。否や。○何故ふ。  
動物を苦しむべし。小鳥の巢も取らば  
うらぐ。蠅又蝶の足も翼も引裂くべし。ぎらふ  
や。○汝も既、動物の事を知り。動物を苦しめ  
る。よろしきや。否や。○無學めて。不人情の事を  
さす。子供あり。如何説聞まらばや。

本多澄馬字

# 發兌

東京馬喰町二丁目

島村利助

同日本橋通三丁目

丸屋善七

# 書肆

備中笠岡

細謹社

